

漢語近世音と契丹文字漢字音(9)
一止摂歯音の拗音性の消失をめぐる一

吉池孝一 中村雅之

鄭再發(1966)の「i 韻母の出現」について

吉池：鄭再發(1966)¹の表(643-645頁)より、「i 韻母の出現」(i 韻的產生)の有無にかかわる資料の内、比較的名の知られた資料を提示すると次のとおりです。当該の音変化が明白である場合“√”で、当該の音変化の端緒があると解釈できる場合“?”とするとのこと²。

i 韻母の出現

四声等子 (997-)	
皇極經世声音唱和図 (1011-1077)	
切韻指掌圖 (1176-1203)	?
蒙古韻略 (-1297)	?
蒙古字韻 (-1308)	?
中原音韻 (1324)	√

中村：?と√の違いがどこにあるのか分かりにくいですね。

吉池：?を付したものについては、言語変化の端緒であるのか、それとも資料編纂上の「記録の不完全さ」(材料裏記録的不完善)に拠るものか、いずれであるか確認できないと述べています³。言語変化ではなく、資料の制約による見かけ上のものだという可能性もあるということでしょう。例えば『韻鏡』で、去声の夬韻や廢韻の韻字を置く場所がないので、空いている入声欄に置くような資料上の処置があります。『韻鏡』の場合は資料上の処置であることは一目にして瞭然であり、また「去聲寄此」と明記してあるので問題はないのですが、資料によっては処置の明記がなく言語変化とも表記上の問題ともつかないものがあります。「記録の不完全さ」とは、おそらくこのようなことを指しており資料を解釈する場合は慎重でなければならないということでしょう。

¹ 鄭再發(1966)「漢語音韻史の分期問題」『中央研究院歷史語言研究所集刊』36、635-648頁。

² 「材料中已明白提及或表現音變現象的，以“√”號表示，其可以解釋作有音變端倪或現象的，以“?”號表示。」642頁。

³ 「例如上表中記作“?”的疑似音變，到底是語言裏音變的端倪，還是材料裏記錄的不完善，我們無法確認，假使是屬於後一個原因，那麼上文的分期憑籍竟不足憑籍了。」647頁。

中村：鄭氏は「近古」を3期に分け、諸資料により、止摂歯音の拗音性の消失（鄭氏は「i韻母の出現」とする）は「近古中期」から始まるとします。「？」を言語変化とも表記上の問題ともつかないものに付すとすれば、「近古早期」である11世紀の皇極経世声音唱和図を「？」としないのは不可解ですね。

近古早期：10世紀初期～12世紀初期

近古中期：12世紀中期～14世紀末期 **i韻母の出現**

近古晚期：15世紀～17世紀初期

皇極経世声音唱和図

吉池：北宋の邵雍（1011-1077年）の『皇極経世声書』にある声音唱和図が示す音の解釈について、鄭再發(1966)は陸志韋(1946)⁴に拠ります。おそらく、陸志韋(1946)には「i韻母の出現」を認めないとの判断があるのでしょうか。

中村：陸氏の議論を検討する必要がありますね。

吉池：皇極経世書は正声十図と正音十二図で漢語の音節の種類を図示するわけですが、両図を確認しておきましょう⁵。

正声十図 平上去入 平上去入

⁴ 陸志韋(1946)「記劭雍皇極経世的“天聲地音”」『燕京學報』31、71-80頁。

⁵ 四部備要の『皇極経世書』の図を横書きすると次のようである。これを研究の便宜の為にどのように配列するかは、研究者によって異なる。

	平上去入		開發収閉
	日月星辰		水火土石
一聲	多可介吉	音一	古甲九癸
	禾火化入		□□近揆
	開宰愛○		坤巧邱棗
	回每退○		□□乾蚪
二聲		音二	
	・		・
	・		・
	・		・

この対談は長田夏樹(1979)所収の声図と音図の配列法を参照した。なお所収字は諸研究文献ではほぼ同一（互と互、弃と棄など異なる場合もある）であるのでそれによった。ここに挙げた四部備要の字とは異なる。長田夏樹(1979)「『皇極経世書』声音図の音価と『韻略易通』の音韻体系について—『雞林類事』の朝鮮語を表わす漢字音の体系と関連して—」『神戸外大論叢』第30巻3号。(2001)『長田夏樹論述集（下）漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民族言語学試論・邪馬台国の言語—』京都：ナカニシヤ出版、616-633所収。

		日月星辰	日月星辰
一声	關	日 多可个舌	星 開宰愛○
	翁	月 禾火化八	辰 回每退○
二声	關	日 良兩向○	星 丁井亘○
	翁	月 光廣況○	辰 兄永瑩○
三声	關	日 千典旦○	星 臣引良○
	翁	月 元犬半○	辰 君允巽○
四声	關	日 刀早孝岳	星 牛斗奏六
	翁	月 毛寶報霍	辰 ○○○玉
五声	關	日 妻子四日	星 ○○○德
	翁	月 衰○帥骨	辰 龜水貴北
六声	關	日 宮孔衆○	星 魚鼠去○
	翁	月 龍甬用○	辰 烏虎兔○
七声	關	日 心審禁○	星 男坎欠○
	翁	月 ○○○十	辰 ○○○妾
八声	關	日 ●●●●	星 ●●●●
	翁	月 ●●●●	辰 ●●●●
九声	關	日 ●●●●	星 ●●●●
	翁	月 ●●●●	辰 ●●●●
十声	關	日 ●●●●	星 ●●●●
	翁	月 ●●●●	辰 ●●●●

○は音が有り字が無いもの、●は音も字も無いものを指します。關は開口韻、翁は合口韻であり、声調の平上去入の順に字が配列されています。この図は、合口介音と主母音と韻尾を同じくする韻母をまとめたもので、拗介音の有無は問題となりません。

正音十二図	開發収閉	開發収閉
	水火土石	水火土石
一音	清 水 古甲九癸	土 坤巧丘奔
	濁 火 □□近揆	石 □□乾虯
二音	清 水 黒花香血	土 五瓦仰□
	濁 火 黄華雄賢	石 吾牙月堯
三音	清 水 安亞乙一	土 母馬美米
	濁 火 □爻王寅	石 目兒眉民
四音	清 水 夫法□飛	土 武晚□尾
	濁 火 父凡□吠	石 文萬□未

五音	清	水	卜百丙必	土	普朴品匹
	濁	火	歩白備鼻	石	旁排平瓶
六音	清	水	東丹帝■	土	土貧天■
	濁	火	兌大弟■	石	同覃田■
七音	清	水	乃妳女■	土	老冷呂■
	濁	火	内南年■	石	鹿犖離■
八音	清	水	走哉足■	土	草采七■
	濁	火	自在匠■	石	曹才全■
九音	清	水	思三星■	土	□□□■
	濁	火	寺□象■	石	□□□■
十音	清	水	■山手■	土	■□耳■
	濁	火	■土石■	石	■□二■
十一音	清	水	■莊震■	土	■又赤■
	濁	火	■乍□■	石	■崇辰■
十二音	清	水	■卓中■	土	■拆丑■
	濁	火	■宅直■	石	■茶呈■

□は音が有り字が無いもの、■は音も字も無いものを指します。清は清音、濁は濁音です。開発収閉は、『韻鏡』の等位と対照させてみれば次のとおりです。

- ①一、二、三、五音の開発収閉は、開（1等）、發（2等）、収（3等）、閉（4等）に相当する声母の字が配列されている。開発は直音で、収閉は拗音。
- ②四音の開発と閉は全て輕唇音の3等。
- ③六、八音の開発は一部（八音開にある「自」止摂3等韻齒頭音）を除き1等。
- ④七音の開発収は一部を除き、開（1等）、發（2等）、収（3等）。
- ⑤九音の開発収は、開（4等字⁶「思」「寺」止摂3等韻齒頭音）、發（1等）、収（3,4等）。
- ⑥十、十一音の發収は、發（2,3等韻の齒上音（莊組））、収（3等韻正齒音（章組））。
- ⑦十二音の發収は、發（2等韻舌上音）、収（3等韻舌上音）。

この図は、声母と拗介音を同じくする声母を開発収閉の順にまとめたもので、合口介音の有無は問題となりません。

中村：八音の開に「自」止摂3等韻齒頭音（精組）が配置され、九音の開に「思」「寺」止摂3等韻齒頭音（精組）が配置されることから、止摂3等韻齒頭音の拗音性は消失し直音と

⁶ “4等字”のように“～等字”と表記した場合『韻鏡』の4等欄の字であることを示す。その“韻母”は4等韻ではなく、3等韻である場合もある。注7の周祖謨(1942)にある「自字爲四等字」も同様で、『韻鏡』及びそれに準ずる韻図の4等欄の字であることを指すが、その韻母は3等韻である。

なっていたことはこの図の特徴としてよく知られていることですが⁷、陸志韋(1946)の考えは異なるようです。六音を見ると、開に東 (oŋ)、土 (o)、同 (oŋ) が配され、發に丹 (an)、貪 (an)、覃 (am) が配されており、開に o、發に a が対応しており伝統的な等韻の一等、二等とは異なっています。このことより、開に i や ɪ が対応することも、『中原音韻』のように i̇ が対応することも有り得ると考えているようです。もっとも、明確に i̇ の存在を否定しているわけではないようです。

還有一種很奇特的現象，就是‘自思寺’列在‘開’類，‘士’在‘發’類。(切韻指掌圖也把‘自思寺’當一等用。司馬光跟邵雍是同時代的洛陽人。後人把指掌圖歸在司馬光名下，未始沒有一點蛛絲馬跡。)‘自’是切韻的 (i̇ɛi >) i，今音的ɪ，‘士’是切韻的 (ɪ̇ɛi > ɪ) ɪ，今音的ɿ。我們爲中原音韻的支思韻擬了一個不肯定的 i̇ 音，至少表明在 i, ɪ 跟ɪ, ɿ之間還可以有別的音色。邵書的‘自’跟‘士’當然更不能隨便的擬成舌尖音。他的‘自’又是跟‘士’不同音色的。依舊是切韻的 i 跟ɪ 麼？那麼圖裡‘自思’（‘開’ i）配‘在三’（‘發’ a），跟等韻一二等的觀念差得太遠了。上文說，這圖除了‘走思’二行，還有‘東乃’二行也不符等韻的等第。‘東’行‘東’（他的 oŋ）配‘丹’ (an)，‘土’ (o) 配‘貪’ (an)，‘同’ (oŋ) 配‘覃’ (am)。o 音可以作‘開’類而 a 作‘發’類，可見在他的系統裡，把主元音 i, ɪ 作爲‘開’也未始不可能。反過來說，i, ɪ 也許變了像耳目資的‘u 次’，近乎 i̇，那也無從否認。 79-80 頁

吉池：正声十図の五声が問題なのではないでしょうか。

五声	關	日	妻子四日	星	○○○德
	翁	月	衰○帥骨	辰	龜水貴北

これについて、陸志韋(1946)は「第五聲的格式是 i ei」(74 頁)とします⁸。「格式」の定義はありませんが、開口韻と合口韻の共通部分と見てよいのでしょうか。そうすると、陸氏は、

⁷ 周祖謨(1942)「宋代汴洛語音考」。(1966; 1981)『問學集』(下)北京：中華書局、581-655 所収による。「音八爲精清從三母。從母之仄聲當讀如精母，其平聲當讀如清母。又自字爲四等字，今列爲一等，與等韻不同，蓋精組之字，其韻已讀爲ɪ，故等次亦變，此與切韻指掌圖合。下音九之「思」「寺」並同。」594 頁。

⁸ 参考までに、陸志韋(1946)の 73-74 頁にある声図の「格式」を挙げると次の通り。

第一聲的格式是	a	ai
第二聲的格式是	oŋ	əŋ
第三聲的格式是	an	ən
第四聲的格式是	au	əu
第五聲的格式是	i	ei
第六聲的上半的格式是	日 oŋ 配下半月 o	
	星 woŋ	辰 wo
第六聲的下半的格式是	o	
第七聲的左半的格式是	əm	am

「妻子四日」と「衰○帥骨」の格式は*i*で、「○○○徳」と「龜水貴北」の格式は*ei*と考えていたということになります。その考えを認めるならば、陸志韋(1946)は止摂3等韻齒頭音(精組)の子・四を*i*ではなく*i*と見ていたということになります。

中村：妻子四日を同じ韻母の字として配することと、子四と同韻母の自思寺(止摂3等韻齒頭音(精組))を開に配することは“衝突する”ように見えるわけですね⁹。鄭再發(1966)は、妻子四日を同じ韻母とする五声によって、八音と九音の自思寺が開に配されることを資料編纂上の制約によるものと考えて、自思寺には未だ拗音の消失は見られないとしたのかもかもしれません。

吉池：両者を立てることができるのか、或はどちらかを立て、どちらかを捨てるのか、という問題ですが、この点について平山久雄(1993)¹⁰には興味深い解釈があります。

平山久雄(1993)説

吉池：平山久雄(1993)に五声關日の「妻子四日」を相配することについて、①「妻子四」と、②「妻子四」と「日」、の二つに分けて述べています。先ず①ですが、引用の83頁によると、妻[-i]、子四[-z] (止摂精組字。ɿに相当)、士[-z] (止摂莊組字。ɿに相当)を音韻論的/-i/と解釈して「妻子四」を同一韻母として配置したとのお考えのようです。

「關日」が{i}を表わすことはその字母「子」「四」からも、また「八音・濁火」の字母「自」, 「九音・清水/濁火」の字母「思」「寺」, 「十音・濁火」の字母「士」からも明らかである。即ち止摂開口精組及び莊組の韻母が声母の摩擦要素の影響により、現代諸方言におけると同じく、声母の摩擦要素の調音を多少緩めながら延長して有声音化した[z][ʒ]⁽²⁴⁾に変化していた([z][ʒ]のように[i]の要素が多少残っていたかも知れない)。それを我々は/-i/と解釈する。また字母「妻」から見て韻母[-i]もここに含まれ、それは/-i/の「収」即ち/-i/と見なされていたことになる。韻母[-i]の解釈について、今日の北京方言に対する音韻論的解釈と同様の理論的整理を『唱和図』の作者は行っていたことになる。(83頁)

24 中国ではこれらの音を表記するのに[h][ɥ]を用いることが行われている。(104頁)

⁹ 五声で同一韻母として並置された「妻子四日」は、『中原音韻』によると、妻と日は齋微韻に配され、子と四は支思韻に配されており韻母が異なる。『蒙古字韻』のパスパ文字表記を見ると、妻[ᠰᠢ c'i]、日[ᠵᠢ ᠵi]、子[ᠰᠢ ᠵhi]、四[ᠰᠢ ᠵshi]、士[ᠰᠢ ᠵchi]であり、妻日の韻母は*i*で、子四士の韻母は*hi*である。*hi*は [ə]か [i]に近似した音とされるので*i*とは韻母が異なる。

¹⁰ 平山久雄(1993)「劭雍『皇極經世声音唱和図』の音韻体系」『東洋文化研究所紀要』120、49-107頁。

中村：現代北京語の妻子四士を補い合う分布により同一韻母と解釈して、ピンイン表記で *qi, zi, si, shi* のように *i* で表記するような考えを北宋の邵雍はすでに持っており、それによって『唱和図』を作成したと想定するわけですね。

吉池：興味深い解釈ではありますが、わたしは実際の音声に拠ったのではないかと思っています。

中村：どういうことでしょうか。

吉池：正声十図の五声を再度提示すると次のようなものです。

五声	關	日	妻子四日	星	〇〇〇德
	翁	月	衰〇帥骨	辰	龜水貴北

すべての音節の終わりに *-i* が想定されます。そこで、妻子四日は、妻 *[-i]*、子四 *[-z]* (*ㄥ* に相当) ではなく、妻 *[-i]*、子四 *[-z]* のような *-i* で終わる韻母として配置したのではないのでしょうか。この *[-z]* という音は平山氏が音声の可能性として提示したのですが、わたしはこれを単なる音声的な変異ではなく、邵雍自身が音形として認識していたものであり、「狭い母音 + *i*」及び「*i*」を五声に配するという意図をもって配置したと考えたいのです。邵雍は、理論ではなく、実際の音によったというわけです。その後、子四 *[-z]* の *[i]* は消失することになります。

中村：平山氏の *[-z]* がどのような音声を意図したのかについては不明瞭ですが、私は中舌と前舌の中間的な *[j]* に近いものを想像していました。吉池さんは二重母音のように短い *[i]* を添えた音声を想定するわけですね。

吉池：わたしは、邵雍には止撰開口の精組の音は *[tsʰj]* *[tsʰji]* *[sʰji]* のように聞こえ、莊組の音は *[tʂʰj]* *[tʂʰji]* *[ʂʰji]* のように聞こえていたのではないかと想像しています。

中村：平山氏は *[j]* を直音 *[-z]* に対応する拗音としてとらえ、そのために同列に配置したという解釈でしたが、吉池さんは韻尾 *[i]* を共通するものとして配置したと解釈するということですね。わたしは、少なくとも配置の解釈については、平山氏の考えを支持します。いずれにしても「妻子四」を相配させたことについて、「子四」が拗音性を消失していたとしても、その配置の説明は可能だということですね。②の「妻子四」と「日」の方はどうでしょうか。

「妻子四」と「日」の相配

吉池：平山久雄(1993)は、入声の日の音声について、誤解がなければ *[ʒiʰ]* という音声を想定

するようであり¹¹、これが五声の關日において、妻[-i]や子四[-z]と共に配されることについて次のようにあります。

「關日」を{ət}と推定するのは平・上・去声の{i}に相配するものとして不適當と見えるかも知れないが、私はそれを次のように理解する。

「翁月」の平・上・去声は/-uəi/であり、この韻母は声母が莊組の場合に限って存在し、音声的には前述のように[-uəi]の如くであった。一方その入声{uət}において主母音[ə]につづき/-t/の調音のために舌尖が引き上げられることが上記[-uəi]と類似していた。そこで{uəi}（莊組）と{uət}とは相配する位置に置かれたのである。これを基に考えると、「翁月」入声に対する「關日」入声に{ət}が置かれるのは極めて自然である。むしろ「關日」の平・上・去声に{i}が配されている理由を説明する必要がある。この点については次のように考えることができるであろう。

{ət}の「開」/ət/の音声においては、/-t/の閉鎖が比較的明瞭であったため、主母音の[ə]は前寄りの狭い変種[ə]として現れていたのではないか。[ə]は/-i/の音声[z]と印象が近い。[z]の調音が少し緩めば[ə]のように聞こえる。また「収」「閉」/-iat/の音声は、[ʔ][e]が[i][i]に付着した微弱な音であったとすれば、{i}の「収」「閉」/-ii/の音声と近いことになる。このような音声的類似を基に、『唱和図』作者は{i}を{ət}と相配する位置に置いたのである。{i}の位置としてはこれより更に適する場所は考えにくい。 (91 頁)

中村：これは日[ʒi^o]が入声韻尾-tを保持していたことを前提とした議論ですね。入声韻尾については、次に提示するように、契丹語碑文中の借用漢語のA層（多数派）では韻尾-k, -tは表記されず、韻尾-pは表記されます¹²。韻尾-tについては、例えば、密^々mi、漆^々si (ts-,ts^h-,s-の区別がない)のように韻尾-tを認め得る成分はありません¹³。これを以って、こ

¹¹ ①十音と十一音について次の議論がある。「これらの子音は「発」では捲舌音[s-][tʂ-]等であったが「収」では介音/i/の影響で[-j][tʃ-]（多少捲舌性を帯びていたかも知れない）等であったと思われる。但し{-z}{z}は「発」には現れず（これはその来源である中古音日母が細音韻母とのみ結合したことによる）、「収」においてのみ[ʒ-]（やはり多少捲舌性を帯びていたかも知れない）として現れた。この[ʒ-]は[-j-]と直接に対立する有声音ではなく、母音的音色を特徴とする“次濁音”の系列に属するものとして摩擦の弱いものであったろう。」74 頁。
②五声における入声の音価を議論する箇所において、直接に「日」（質開三）の音に言及することはないが、「kiət/[kiət]「訖」（迄三開）」（90 頁）という例を挙げる。これは「日」の韻母に相当する。

*なお平山氏は、{-z}の - はそれに始まる音節が声調の陰調に属することを表わすとする。また、音図の開発収閉を/k-//kj-//ki//kji-/のように推定するが、それをまとめて{k}と記すとする。

¹² 吉池孝一・中村雅之(2020)「漢語近世音と契丹文字漢字音(8) —契丹小字の入声表記、易・積の韻尾、借用語の層—」『KOTONOHA』第216号、1-10頁。

¹³ 々は、西^々si や懿^々iiの漢字音の表記に使用されるので、入声韻尾tは想定できない。

のような漢語が話されていたとしてよいならば、『唱和図』の入声韻尾の状況も同様であった可能性はあり、このような観点から「妻子四」と「日」の相配を考えてもいいのではないのでしょうか。

(契丹語碑文中の借用漢語の状況)

	旧漢語 k 韻尾	旧漢語 t 韻尾	旧漢語 p 韻尾
借用語 A 層	無	無	b ¹⁾
借用語 B 層	g ²⁾	r ³⁾	
借用語 C 層		l ⁴⁾	

- 1) 漢人名の業の大字𠬞𠬞𠬞 (ŋ-b)。漢数字の十の大字𠬞、小字𠬞𠬞と𠬞𠬞 (fib)。臘月の臘の小字𠬞𠬞𠬞 (lab)。
- 2) 崇祿大夫の祿𠬞𠬞 (lug)。僕射の僕𠬞𠬞 (bug)。博州の博𠬞𠬞 (bog)。度使の度𠬞𠬞と𠬞𠬞 (d-g)。易經の易𠬞𠬞 (ig)。積慶宮の積𠬞𠬞 (sig)。
- 3) 樞密の密𠬞𠬞 (mir/ mər)、
- 4) 筆𠬞𠬞 (bil)

吉池：平山氏の [ʒ] [ʒ̥] という音を利用させていただくならば、わたしは、「妻 [tʂʰi] 子 [tʂʰi] 四 [ʂʰi]」、「士 [ʂʰi]」、「日 [ʒi]」であり、五声關日の「妻子四日」は音節最後の i によって相配されたと理解しています。

中村：いずれにしても、正音十二図で自思寺を開に配置する処置により、止摂歯音の拗音性の消失を想定することと、正声十図で妻子四日を同一韻母とする配置は衝突するものではないとすることは可能だということですね。ところで、平山久雄(1993)には「止摂開口精組及び莊組の韻母」が /i/ となっていたとあります。精組だけでなく莊組の字も拗音性が消失していたとするわけですが、この点を確認しておきましょう。

精組と莊組韻母の拗音性の消失

吉池：平山久雄(1993)は、北宋の邵雍の『唱和図』では、止摂の精組と莊組の字は拗音性の消失により /i/ となっていたが、章組の字は拗音性を保っていた。それが元代の『中原音韻』では章組も拗音性を消失し止摂の精組と莊組と章組は「支思韻」となったとします。次に関連する箇所を引用します。

「十音・濁火」において「士」(之韻上声崇母)が「発」に置かれているのは、止摂開口莊組の韻母もまた精組の場合と平行して /i/ となっていたことを物語る。(74 頁)

「十音・清土濁石」の字母「耳」「二」がともに止摂字であることは偶然であろう。但しここから次のような音韻史的意味を読むことはできる。即ち『中原音韻』では止摂章組(日母

を含む) 開口字は莊組に合流して「支思韻」を構成し、その韻母は/-i/となっているが、『唱和図』ではまだこの変化が起こっていないのである。(75頁)

中村：精組と莊組の字が拗音性の消失により/-i/となっていたことは八・九音の開の「自思寺」及び十音の發の「士」から認めていいのでしょうか。また、章組の字が拗音性を保っていたということは十音の収の「耳二」によって認めていいのでしょうか。

問題は、『中原音韻』(1324年)のように章組が拗音性を失い精莊組に加わるのはいつかということです。『蒙古字韻』(1308年朱宗文校訂序)などのパスパ文字資料を見ると¹⁴、止摂の精組と莊組の韻母は-hi と表記され、止摂の章組(日母含む)は-i と表記されますから¹⁵、章組の拗音性の消失はなく、北宋の邵雍(1011-1077年)の『唱和図』と同じです。

吉池：止摂齒音の韻母について、『中原音韻』(1324年)の直前の資料である『蒙古字韻』(1308年朱宗文校訂序)に、北宋の邵雍(1011-1077年)『唱和図』と同様な状況を見て取ることができるわけですが、契丹文字による借用漢語ではどのようになっているか、興味深いですね。次回はこの点を検討しましょう。

¹⁴ 中村雅之主編(2014)『パスパ字漢語資料集覧』愛知：古代文字資料館。

¹⁵ i と hi が『蒙古字韻』において同じ支韻としてまとめられるのは、音を考慮した処置ではなく、文字検索の便宜を図ったための処置であろう。母音の特殊な表記 \int hi を分解し、 \int i と \int などの、 \int i の字形の類似によってまとめて配置したと考えるのが穏当である。『蒙古字韻』は韻書というよりも、パスパ文字検索の手引きとみたほうがよい。